

個性

城南中学校 二年 松本 果倫

「この戦争さえなかったら、愛する国のために死ぬより、わしは、愛する人のために生きたい！」これは、あるドラマの中で出てきたセリフだ。この言葉を聞いたとき、私は、愛する人のために「死にたい」と言うのではなく、愛する人のために「生きたい」と言うところが強く印象に残った。

このドラマは、戦争の時代に生きていた人物の実話をもとにした話である。最初は何気ない日常が描かれていた。しかし、戦争が始まると男の子が兵隊になるために訓練をしていたり、男性は戦地に連れて行かれ戦ったり、戦地に行かない人達は貧しい暮らしをする様子が描かれるようになり、私はとても驚いた。小学生が勉強ではなく戦う訓練をするなんて思いもしなかったからだ。さらに戦地に行った人々は豆ほどの大きさの乾パンしか食べられないのにお国のために戦わなければならないし、人はどんどん亡くなってしまふ。残酷すぎる世の中に、私は悲しくなった。戦地に行くことになった男性は、好きな女性に、「生きて帰ってこられたら結婚してください」と伝え、二人はとても嬉しそうだったのに、戦地に行った男性は亡くなってしまった。戦争がなかったら二人はずっと幸せに暮らせるはずだったのに……。そのうえ戦争で亡くなってしまった人達に、周りの大人たちは口をそろえて「立派だった」と言っていた。私は何が立派なのだろうと思った。戦争で苦しんで死んでしまった人達をどうして立派と言えるのか。なぜ争うことが正義なのか。戦争なんてみんな嫌なのに、なぜ国と国で争うのだろうか。なぜ仲良くできず土地の取り合いなんかするのだろうか。なぜ人間の力を命を奪うために使うのだろうか。私には、そういった考えが全く分からなかった。

しかし、あるニュースを見たことによって、みんながみんなそうでないことを知った。それは、大阪・関西万博に訪れた人々が電車が動かなくて帰れない、というニュース。お客さんは万博の会場で電車が動くのを待つことになった。多くの人がいる中、暑くて体調を崩してしまう人や、警察や駅員とケンカをする人がいた。しかし、その時ドイツ館やオランダ館の人達がお菓子や水を配布したり、電力館の人達は、スマホの充電コードを貸していたり、ポルトガル館の人達はダンスを披露したりしていたのだ。日本人だけでなく、世界のいろいろな国の人々が協力してお客さんの支えになっている様子を見て、私は、世界中の国々がみんな争っているわけではなく、「誰かを助けたい」と思い行動している人々

がいるということを知った。

私は、あのドラマで見たような悲しいことが起こる戦争がなくなつてほしいと思う。そのためには、人と人との関係が良くないといけないと思う。お互いがお互いの個性を認め合い、譲り合うことで平和な世界が生まれると思う。私が二年生に進級した時、担任の先生が言っていた。

「私はクラスのみんなが仲良くなりなさいとは言わない。誰にだって苦手な人はいるし、無理に仲良くなっても辛いだけ。でも人には人の個性があるから個性は否定せず大切にすること。」でも自分の生活を振り返つてみた時に、苦手な人へ冷たい態度をとってしまう自分がいた。個性を認めるのはとても難しい。人のマイナスなところに目を向けてしまう。気が合わないと思う時もある。しかし、誰にだって良いところは必ずある。だから私は、苦手な人でも個性を認めて受け入れられるようになりたい。人の良いところをたくさん見つけたい。一人の力では変わらないかもしれない。誰かが変わるのを待つより、自分が変わればいい。そうしていかは、争いのない世界、お互いを認め、個性を大切にできる平和な世界にしたい。